https://gene-navi.igaku-shoin.co.jp/articles/naikainomichi_040

復刻 内科医の道　　更新日付： 2024/07/12

第40回　「General」を目指す「generalist」

今井 裕一（多治見市民病院院長）

本連載では2012年1月から2014年4月にかけて医学書院の電子ジャーナルサイト「MedicalFinder」に掲載されたエッセイ『内科医の道』を復刻掲載します。さまざま困難を乗り越えて道を切り拓いてきた先達たちが贈る熱いメッセージは，時を経てもその価値は変わりません。内科医人生の道しるべとなる珠玉のエッセイを堪能ください（注：断り書きがない場合，執筆内容，所属などは初出時のものです）

今井 裕一（執筆時：愛知医科大学腎臓・リウマチ膠原病内科）

初出日：2012/08/31

私は，今から35年ほど前に秋田大学医学部を卒業した。秋田大学医学部は，第二次世界大戦後に初めて設立された医学部であり，その後の1県1医科大学の端緒となった。当時の医学部長が55歳前後，教授陣のほとんどが40代半ばで，今考えれば，新しい医学教育の実験場であり，われわれ学生はモルモットであった。ちょうど内科学も専門分野に細分化し，専門医でなければ医師でないような風潮が出始めていた頃であったが，その流れに逆行するように，地域医療を充実させる目的で設立され，「なんでも診られる医者：generalist」を育成することを理念としていた。

基礎医学は3年で終了し，4年では，臨床医学の講義（臨床総論，診断学）を習い，4年3学期から午前中は外来診療，午後は臨床講義であった。5年の秋から1年間ベッドサイド教育＋地域医療実習があった。内容の詳細については，同級生である南木佳士の『医学生』（文藝春秋，1993）に記載されている。現在行われている医学教育とほぼ類似したシステムであった。しかし，35年前の医学部教育は，6学年の最終時点まで座学の講義が主体であったことを考えると異例中の異例であった。

＊＊＊＊＊

大学卒業後，東京の虎の門病院で研修を開始した。現在の研修医とほぼ同じ研修スタイルであるが，卒業生の90％ぐらいが大学医局で研修を開始していたことを考える

と私は異端児であった。同級生には，「これで今井の将来も終わった」とまで揶揄された。当直初日にDOA（dead on arrival：死亡患者）の患者を診察することになった。そこから土砂降りの雨のなかを走るように臨床の雨に打たれた。最初の病棟担当患者が，周期性四肢麻痺発作，低カリウム血症，尿細管性アシドーシス，シェーグレン症候群であり，3つ歳上のオーベンと診断し治療した。翌日緊急入院した患者は，右眼だけの乳頭浮腫があり，直ちに行った頭部CT検査で転移性脳腫瘍がわかった。年末の12月30日は24時間当直で，朝方に救急外来を受診した患者を引き継いだ。血液検査を行うと白血球数 10万/μL，血小板数 4万/μL，意識障害が進行しつつあり，カルテから慢性骨髄性白血病の急性転化，脳塞栓＋脳出血と診断した。朝8時半に引き継ぎ，深夜2時に息を引き取った。奥さんに1日の出来事を説明し，剖検を許可していただき朝方にお見送りをした。

＊＊＊＊＊

臨床で飯を食っていけるように思い始めていた頃に，17歳の女子高校生を受け持つことになった。水頭症で発症した脳松果体腫瘍で，脳室-腹腔シャントで減圧し救命できたのだが，その1年後に腹膜播種と全身転移で再入院してきたのである。化学療法も効果なく徐々に衰弱し全身の疼痛のために眠れない日々が続いていた。夜中に麻薬が切れると注射をするために病室に何度も足を運んだ。臨終の場面で，ご家族を目の前にして，流れる涙で「ご臨終です」が声にならなかった。当時45歳の部長の先生も同じであった。ナースセンターに戻って，「病理解剖をお願いするのをやめて，このまま帰宅していただきましょう」と二人で決めた。通常であれば，30分くらいの間合いを置いて，これまでの病状説明と剖検をお願いすることになっているのであるが，声をかけるのを渋っているとお母さんがナースセンターにやってきた。簡単なお礼を言った後で「あの子は，万一のことがあったら，解剖して医学の役に立ててほしいと言っていましたので，ぜひ病理解剖をお願いします。あの子の最後の願いを叶えてあげたいのです」と言われた。私と部長は，17歳の女の子に完全に負けた。「先生，もっともっといい医者になってください」という彼女の声が聞こえた。

その後大学に戻って再度勉強する道を選んだ。7年目で内科専門医（現在の総合内科専門医）を取得してから専門を腎臓学に決めた。ようやく自分一人で病気を診断し，治療法を決定して，患者を救える自信ができたのは，8年目以降である。

＊＊＊＊＊

最近テレビで「ドクターG」が話題であるが※，その「G」の意味は皆さんどのように考えているのでしょうか？　「なんでも診られる医者（generalist）の“G”」なのでしょうか？

35 年間「generalist」として生きてきた私は，別の意味合いを感じている。軍隊用語では「General」は将校，将軍を意味し，1 つの部隊のリーダーを指している。いろいろな情報を多方面から収集し，優先順位を決定して，decision（決断）を下し，問題を解決する能力を有する人物であると定義できる。「General of medicine」という用語があるとすれば，(1) 医療安全，(2) 情報収集と医療レベルの向上，(3) 決断力，(4) チーム力，(5) 統率力，(6) 指導力が必須条件であろう。診療所でもクリニックでも，地域の基幹病院でも大学病院でも，平時でも災害時でも，国内でも国外でも，「General」な「内科医」が必要とされているのである。私はドクターG にはなれないが，これからも「General」を目指す「generalist」であり続けたいし，いかにして後輩を「General」に育て上げるかが，私の責務であると考えている。

（執筆：2012 年 7 月 27 日）

※「総合診療医ドクターG」とは，NHK-BS のちに NHK 総合で 2009～2017 年に放送されていた医療を題材にしたクイズ形式の情報バラエティ番組。毎回現役の総合診療医が登場し，VTR で問診のケースを紹介。スタジオにいる研修医たちが病名を解き明かしていく。